武紋戦記

反自律(=｀ω´=)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武紋戦記

【Ｎコード】
Ｎ５６１７Ｚ

【作者名】
反自律（＝、ω′＝）

【あらすじ】
諸王国連合盟主国国王都に、突如、王命により不可解な魔法実験の告知が発布される。
身分も専攻学科にも一貫性がない王立学院の学生たちを集めて、なんらかの魔法実験を行うというのだ。
その実験とは、ある種のマジック・アイテムの性能を測ることを目的としていたが、実質的には学生たちが最後の一人になるまで戦い合うことを強いるものだった。
様々な背景や思惑を抱えた学生たちによるバトルロワイヤルが、

今、始まる。

序　発端

一連の騒動は、「魔法塔」内で発見された不可解な術式群について国王に向け報告されたことからはじまった。少なくとも、表向きの書面には、そうに記録されている。

ただし、物事には正規の記録からは漏れる子細というものもある。

そもそもの発端について補足するのならば、のちに「武紋」と呼称されることになる複合型積層術紋式を不自然な状況で魔法学科の若き碩学が不自然な状況で「発見した」ときから……さらに遡れば、その「武紋」を何者かが用意したところが……そもそもの発端、なのかもしれない。

が……この事件が王都全体を揺るがすほどおおごとになってしまった一番の原因は、本来ならば興味を示すべきではない瑣事に為政者たる盟主国王が興味をおしめしになったことにある……ということに、衆目の意見は一致している。

つまり、盟主国王がむやみに煽るような布告をださなければ、あのような結果にはならなかったであろう……と。

この事案は、多忙な盟主国王のこと、通日恒例の御前会議にて、前後に雑多な決済事項や報告を挟みながら「その他の煩雑事」として形式的に奏上され、国王の耳に入れられたにすぎない。

陪臣たちは、てっきり国王もこの報告を聞き流し、スルーして終えることだろう、と、予想していた。はっきりいって、他にも急を要する案件はいくらでもあり、山積みとなっている。

だが、盟主国王は……より、正確に彼のお方の肩書を記述するのなら、「諸王国連合盟主国国王」、ということになる。あえて俗ないいかたをするのなら、三代前にこの大陸の大半を併呑した覇王の孫、だ。

変事ではあっても国政になんらかかわりのないこの報告にいたく興味をしめし、きわめて異例のことながら、その発見者を御前に召

しあげ、その口からじかに話しを聞きたい……と、その場で仰せになられた。
御前会議で盟主国王が発する言葉は、むろんのこと軽んじられることはない。もっと端的にいって、かなりの強制力をもつ。
その強制力の前では、発見者がまだだ年若いこと、それに、彼のものが被差別民族の出身であることなどはささいな問題とみなされ、早急に召したてられることになった。

「……その日、わたくしは、いつものように魔法塔の奥深く、埃みまみれた未整理の書棚から、研究すべき資料を探していました。それが、学徒としてのわたくしの仕事だったからです」
御前に召し出されたリッツ・リロンは、平伏をしながら淡々とした口調で報告をする。
「すると、書棚の奥から、わたくしを呼ぶような声がいたします。耳に聞こえる声ではなく、頭の奥に響くような声が。
研究者としての勘、といいましょうか、それとも、そのときに限って、太古のマジック・アイテムがわたくしを招きましたのでしょうか。
わたくしは、その声に導かれるままに奥へと、普段、踏み入れない領域へと進み、そこで……燐光を放つ箱を、書棚の中にみつけました。
これも、実際に光を放っていたわけではなく、その箱だけがわたくしの視界のなかで、ひときわ明瞭に迫ってきた、ということです。
わたくしは、魅入られたようにその箱に近寄っていき、箱を手にし、中をたしかめました……」
箱の中には……リッツが知らない複雑な術式が記されたカードが、何枚か、納められていた。ちいさな箱、ではあったが、なんとも名状のしがたい魔力を放っている。まだ一学徒の身であるリッツにしても、その来歴不明のアイテムがどうやら自分ひとりの手には余る代物だ、ということについては、瞬時に判断を下せた。

そこでリッツはその足で術式が記されたカードを魔法塔上層部に提出し、魔法塔上層部はひととおり調査した後、すぐさま国王府に提出した。

「このフリットが王都になったのは、たかだかこの四十年。フリットの都自体は、四百年以上の歴史を誇り、魔法塔は、そのフリットの都よりもさらに古い。王都となる前のフリットの都は、魔法使いが集う土地として有名だった。

どんなお宝が埋もれていても、不思議じゃあないさね」

そう解説するのは、同席していた魔法塔最高責任者と王立学院長を兼任する通称「不眠の魔女」、ニッターッタ・タン師だ。発見者のリッツは王立学院の学生、それも、魔法学部に所属している関係で、呼ばれたわけでもないのに魔法学部の責任者として同行してきた、形になる。研究一辺倒で「引きこもりの魔女」との異名もあるニッターッタ・タン師が魔法塔から出ること自体、きわめて異例のことといっていい。

学生として魔法塔の庇護下にあるリッツの身を案じて……というよりは、王宮から魔法塔へ干渉される口実を与えることのないよう牽制にきた……と、考えるのが、妥当であろう。

「術式としては、ひどく手が混んでいるが……いいかえれば、ただそれだけの代物だ。

費用と人手を惜しまなければ現代の技術でも再現できるし、学術的な価値はほとんどない。

問題は、こんなけったいな代物が、なぜ今まで発見されなかったのか……ってことなんだが……」

魔法塔の地下迷宮ならともかく、地上階にある書庫、中でも、リッツのような学生が立ち入ることができる「浅い」領域に何があるのかは……多少、整理が行き届かない部分はあるにせよ、だいたいのところは判然としている。

そんな場所に、本物の「お宝」がころがっているわけがない。つまり、この術式が発見された状況はきわめて不自然といえた。

何者かが、何らかの意図を持って、わざわざ「発見させるために」そこに置いた……と見るのが、妥当だった。

「なぁに、多少不確かなところがあっても、実際に使ってみりゃあええがね。

正規の軍人や役人を使うのが怖いいうんなら、学術実験ということにして適当な学生にやらせりゃええ。

過分な恩賞も用意すりゃ、どこからも文句はでてこねぇでよ」

盟主国王は鷹揚にうなずいて、その場ですらすらと「実験動物」のリストを書きはじめた。

後に役所の書類に記載される「正規な記録」から漏れるであろう子細を補うのならば、「事の発端」は以上の次第となる。

開戦（一）

バイトからの帰り道、紺染めの腹巻きに袖なしの上着、脚半、足袋、といった飛脚姿のヤバネ・ジューロは、王立学院正門前の目抜き通りで立て札の前に人だかりが出来ているのをみつけた。立て札になんらかの公示がなされているらしかったが、距離と人垣にはばまれて文面までは確認できない。

仕事かえりでもあり、正直、人混みをかきわけてまで文面を確認するのも面倒にかんじたが、そのまま脇目もふらずに素通りするのには、このヤバネという若者の好奇心はいささか強すぎた。

この公示、不自然な点、不審に思える点が多々あり、おまけに、何やら「いやな予感」もする。

学院正門前、という場所も、奇妙ではあった。

学生向けの公示なら、校内に専用の掲示板がある。それに、競うようにして公示の内容を読んでいる群集の中には、職人風やら商人風やら、明らかに学生ではないものも多い。

これだけの多くの人の興味を引き付ける公示、とはいったいなんであろうか？

疑問に感じたヤバネは、人込みを掻きわけて公示を読んでみることにした。

「……王府の発布、だって？」

真っ先に目立つ印字に気がつき、ヤバネは軽く眉をひそめてひとりごちる。

「旦那、字が読めるんですかい？」

たまたま横にいた職人風の男が、ヤバネに声をかけてきた。王都の民の識字率は、さほど高くはない。立て札の前にあつまったこの群集も、まともに内容を読める者は、四人に一人いればいいほうだろう。

「ああ。

今はバイトの帰りだからこんななりしているけど、おれも一応学生だし。
ようするに学生の呼びだしらしいけど……王府の印があるのが、どーにも解せねーな……。
まあ、いいか。読んでみるぞ」
ヤバネは布告文にざっと目を走らせながら軽く答え、周囲の者にも聞こえやすいよう、若干、声をおおきめにして読み上げていく。
「……ええっと……。

王の名において、以下の学生に魔法学術実験の協力を求めるものである。

基礎物理学部学生　シャルアリアラ・シャルファフィアナ
統治理論学部学生　ズジャルア・ダズルダッター
古典王朝詩学部学生　ヤバネ・ジューロ
経済学部学生　ダウド・ドウナ
宗教史学部学生　ユン・ティ
理論魔法学部学生　リッツ・リロン

以上の学生諸氏は、速やかに学生課事務局に出頭すること」
ひととおり読み上げてから、ヤバネは声を低くしてひとりごちた。
「……文面でいやあ、魔法の実験をするからそれに必要な学生を呼び集めているようなんだが……にしても、なんなんだ、この一貫性のなさは……。
魔法学の実験だってぇのにまるで関係のない学部の学生を無節操によんでるし……学長はともかく、国王庁の印までおしてある大仰さがどうにもげせねえ……」
まず、「学術実験」に「王命」が使用されることが、異例だし異様だ。
「おまけに、シャルアリアラ・シャルファフィアナっていったら旧

帝国の忘れ形見だし、ズジャルア・ダズルダッターっていったらダズルダッター王家の三男坊だ。
どちらも、たかだか魔法実験のためにおいそれと呼びつけられるほどの軽輩でもねえ」
この二人は、学院内でも有名人であり、同じ学生であるヤバネも名前くらいはきいたことがある。ヤバネに限らず学院に出入りする者なら誰もがその存在を知っている、セレブなのである。
四十年前に「諸王国連合盟主国国王」と覇権を競い、結果、敗れた「帝国」の忘れ形見や、諸王国の中でも五指に入る権勢を誇るダズルダッター王室の子弟が、下級貴族や平民といっしょくたに「学生」でいられることが、「王立学院」の大きな特色でもあるのだが……。
「……それに、ヤバネ・ジューロってのは、古典王朝詩学を専攻しているんだぜ？　まったく、畑違いもいいところだ。
なんだって魔法学の実験に、かび臭い詩の研究をしている文系学生が呼び出されるんだか。
経済学や宗教史学の学生呼んで、いったいなんの魔法実験おっぱじめるってんだか……」
続けてヤバネは、もぞもぞと小声でぼやく。
ダウド・ドウナ、ユン・ティ、リッツ・リロンの三名の名には、聞き覚えがない。
語感からいって、ダウド・ドウナは北方の、ユン・ティは南方の名前に思える。リッツ・リロンにいたっては……流浪の民、フェンリン族の名に思えた。
「……身分も学部も違う学生を集めて、いったいなんの実験をしようってんだか……」
「旦那、詳しいんですね」
先ほど声をかけてきた職人風の男が、再びヤバネに声をかけてきた。
「一応、ここの学生だからな。学内の有名人の名前くらいは知って

いる。
学部も違うし、直接、面識があるわけでもないんだけどな……」
「……身分以外にも……」
不意に、話しに割り込んで来た者がいた。
体のラインが判然としない、ゆったりとした西方風の民族衣装に身を包み、顔の下半分を覆い隠すフードを纏っているが……声から判断するに、女だ。

開戦（二）

フードに隠れていない双眸は切れ長で、鋭い眼光を放ってヤバネの眼線を凝っととらえている。

そして、女にしては、長身だった。周囲の群集と比較しても、目線の位置が高い。背の高さは、ヤバネとさして変わらない。

「……シャルアリアラ・シャルファフィアナとズジャルア・ダズルダッターは、なみなみならぬ武術の素養があると聞く。

確とはいいきれぬが、おそらく、ヤバネ・ジューロも。なにしろ、あのジューロ家の跡取りだという話しだ。

風評こそ聞こえないが、なにもない……ということも、なかろう」

明かに、飛脚姿の男、ヤバネ・ジューロに向かって、語りかけていた。

「ヤバネ・ジューロはともかく……あとのおふたかたは、高貴な身分でございますからね。

貴族のたしなみとして、乗馬、騎射、槍術に剣術くらいは軽く身につけておいででしょう」

ヤバネも、その女から目を逸らさずに、慎重な口ぶりで答えた。

「これは老婆心でいうのだが、一刻でも早く学生課に出頭するがいいぞ、ヤバネ・ジューロ殿。

実験は、もう始まっている」

民族衣装の女が、片手を掲げる。

その手に、唐突に、長柄の槍が出現した。

人の身長よりも長い柄の先に、両刃の穂先がついている。殺傷能力を持った、「武器」だった。少なくとも、人が多い往来で振りかざすのに似つかわしい代物ではない。

立て札の周囲に密集していた群集が悲鳴をあげつつ、蜘蛛の子を散らすように、わっとその女から離れはじめた。

「……やっぱり、シャルアリアラ・シャルファフィアナ様かよ」

飛脚姿のヤバネは、槍を持った女から目を離さずに、後ろに飛んで間合いを取る。
間合いを取りつつ、素早く冷静に周囲を見回す。
口々に悲鳴をあげつつ槍を持った女から遠ざかった群集は、今度は遠目にこちらの様子を伺っていた。
直接被害にあいたくはないが、遠目からは見物していたい、ということらしい。
こんな時だというのに、まったく、王都の民は物見高い。
ヤバネとシャルアリアラの二人を中心として、ぽっかりと円形の空き地ができており、その周囲を有象無象の群集が取り囲んでいる……という形だ。
「前帝国の皇女様が天下の往来で凶器を振り回すなんて、正気の沙汰ではないですぜ」
ヤバネが緊張感にかける口ぶりで声をかけた。
「シャルと呼ぶがいい。長くて呼びにくかろう」
槍を持った女は、飛脚姿の男にいった。
「それにしても、貴公。丸腰なのに逃げないのだな。よほど腕に覚えがあるのか、それとも、底の抜けたお人よしか……」
そういった女の目が、笑っている。
「いやあ、実は腰が抜ける寸前で、足腰が思うように動かないもんで……」
ヤバネは、ことさらに軽口を叩く。
「貴公。まだ武紋を受けとっていなかったな。そういえば、武紋を受け取る前の学生を倒したときの扱いは、聞いていなかった」
いいながら、女は、飛脚姿の男に、槍の切っ先を向けた。
「まあいい。ことによると、それで失格になるかもしれんが、それもまた一興。覚悟せよ、ヤバネ・ジューロ殿！」

「ま、待ったっ！」
遠巻きにしていた群集の中から、大柄な男が転がり出てきた。
「こ、この人は、まだ、武紋、受け取ってない。
じ、実験の意味、ない……。
け、経済学部学生、ダウド・ドウナ。た、楯の武紋」
大柄な男が前に腕を突き出すと……忽然とその手に、大きな楯が現れる。
シャルアリアラが槍を出したときと同じ、「唐突さ」だった。

開戦（三）

あれが「ブモン」とかいうモノの成果なのか……と、詳しい事情をまだ知らされていないヤバネは、漠とした予測をつけた。

あやしげな魔法実験、とは、つまるところあの「ブモン」とやらに関係することなのだろう、と、ヤバネは推測する。

ともあれ、ダウド・ドウナと名乗った男はヤバネとシャル皇女との間に割ってはいり、無腰のヤバネに背を向け、シャル皇女からヤバネを隠す位置に立った。

こいつは……本物の、お人好しだ……と、ダウドの大きな背中をみながら、ヤバネは半ば呆れた。

面識もない人間のために体を張れる者は、そう、多くはない。

「は、早く……学生課へ……」

「恩にきる！」

ダウドに背中越しにいわれ、ヤバネは、弾かれたように駆けだす。器用に人混みをかきわけ、王立学院の門の中へと。ヤバネにしてみても、与えられた機会をむざむざ無下にするほど無欲ではない。

駆けだしたヤバネの背中から、

「……槍の武紋と楯の武紋、か……それもまた、一興」

という女の……シャル皇女の声が聞こえる。

どうやら……とんでもなくややこしいことに、巻き込まれているらしい……と、ヤバネ・ジューロは思った。

王命による魔法実験、「ブモン」という耳慣れない言葉、忽然と現れた、槍と楯……。

事情わからないなりにも、ヤバネにも、おぼろげに事態の輪郭が掴めてきた気がした。

まずは、学生課へ。

そこで、詳しい事情を聞かねばならない。でないと、動きようがない。

「……槍の武紋と楯の武紋、か……それもまた、一興」
シャルアリアラ・シャルファフィアナ公女は、ダウド・ドウナと名乗った男にそういって、目を細めた。
おそらく、下層階級の出なのだろう。ダウドは、日々の肉体労働に鍛えられた、いかにも屈強な、ずんぐりとした体つきをしていた。王立学院は、試験に合格さえすれば身分に限らず入学させるし、成績優秀なら奨学金も出る。さらに優秀な人材には、民間の出資者が援助の手を差し延べることも珍しくはない。
だから学院には、ダウドのような平民出の学生も少なくはない。
いくら武紋を与えられようとも、あの場で咄嗟に自分の前に出てくることができるダウドの性格を、シャルアリアラは、どちらかといえば好ましく思う。
いかに体力や筋力、あるいは才能に恵まれようとも、ダウドのような身分の者には、武術を覚える機会が与えられない。
どのような流派であれ、ある程度、「使える」ようになるまでには、かなりの時間を割く必要がある。そして、生活に追われる一方の平民は、えして武を嗜めるほどの余裕をもつことができない。いいかえれば、有閑階級でなくては、どんな武も、磨くことはできない。
だから、この男、ダウドは、武術を修めているはずがない。その不利を十二分に承知しつつ、ダウドは武装したシャルアリアラ・シャルファフィアナの前に踊りでてきた……ということになる。
攻撃力に欠ける「楯」使いの身で、丸腰のヤバネ・ジューロをかばう形で。
その心意気やよし……と、シャルアリアラは思う。
「ふふん。
わらわの槍が貫くか、貴公の楯が防ぎきれるか……。
初陣として、不足はない」
シャルアリアラは後退り、ダウドから十分な距離をとり、槍を構

えた。
すると……シャルアリアラの槍が、歩兵用の長柄のものから、騎兵用の……それも、細長い円錐形の切っ先を持つ、槍試合用のランスへと、瞬時に変化する。
「貫け！」
叫ぶと同時に、槍を構えたシャルアリアラ・シャルファフィアナは、滑るような動きで楯を構えたダウド・ドウナへと突進する。
その速度は、通常の騎兵のそれを、完全に凌駕していた。

開戦（四）

『はぁーい、ヤバネくん。
おっひさしぶりぃー。
またお仕事で王都を留守にしていたのかなぁ？』
「なんだ、半生か」
突如空中に現れた半透明の女性に驚くこともなく、ヤバネはそっけなく応じつつ、疾走を続ける。
『半生っていうなー！
このリナクさんには、幽体離脱とか神出鬼没とか、もっとマシなふたつ名があるっつーのっ！』
「半生で悪けりゃ居眠り姫。
ちょっとごめんな。
おれ、みての通り、今ちょっととりこんでいるんだわ。
リナクさんと漫才している余裕ないっぽい」
『居眠り姫ともいうなーっ！
まったく、ラダリアライト王家のお姫様にそんな不遜な態度とるのは、君くらいなもんだよ……』
走って移動し続けるヤバネの前方、ヤバネからみてほぼ固定した位置に浮かび続ける女性は、確かに体の向こう側が透けてみえていたが、その服装自体はそれなりに金がかかっているようみえた。風貌についてもどことなく気品があり、それなりの身分の出であることに説得力を与えている。
「普段、自治会の勧誘とかでさんざん迷惑をかけられておりますからなねえ。不遜な態度もとりたくもなる」
『あっ。今日は勧誘じゃないから。
ヤバネくん、さっき皇女様と喧嘩しかかっていたでしょ？　あれって告知にあった魔法実験のせい？』
ヤバネのいう「自治会」とは、王立学院の学生自治会を指す。そ

の自治会の構成員は、いかにもこの諸王国連盟らしくだいたいのところ王族や貴族の師弟によって占められていた。
ヤバネの属するジューロ家は、どこかの王族や貴族と血縁があるというわけでもなかったが、一年ほど前、ひょんなことからある事件に巻き込まれた某王族をヤバネが助ける事案が発生してしまい、ヤバネの能力についても、少なくとも学生自治会の中では公然のものとなってしまった。
以来、その事件で関わり合いになったこのラダリアライト王家のお姫様を通じて、しつこいくらいの勧誘にあっている……というわけである。
声をかけられるたびに理由をつけては断るヤバネと、いくら断られても勧誘をあきらめないリナクとは、ふたりの性格もあってから最近ではかなり気安いものとなっていた。
「らしいね。どうも。
おれも実験の詳細についてまだ知らされてないから、これから学生課にいって事情を確認してくるところ……っと、着いた。
そういうことで、詳しいこと、聞いてくる」
事務棟の前に到着したヤバネは、早口にリナクに告げると返事も待たずに足早に建物の中に入っていく。
『ああ。うん。
またあとで。ヤバネくんに伝えておきたいこともあるし……』
リナクは、そんなヤバネの背中に声をかけたものの、事務棟の中にまで後を追ってついていくことはなかった。
幽体離脱時のリナクは、事務棟の壁などの物理障壁も当然のごとくすり抜けていくことができるのだが、時と場合により、必要以上に出しゃばりすぎない方がいい場面があることも、この姫はわきまえている。
血が濃い……といういわれ方をすることが多いが、歴史のある王族や貴族の中には、時として異能の持ち主が生まれることがある。
そうした異能は、常人を凌駕する身体能力や魔法への適性など、比

較的わかりやすい形で発現することが多かった。
が、中にはこのリナク姫の「幽体離脱」のように、その利用価値についてはかなり微妙なものもそれなりに存在した。この状態にあるときのリナク姫の「本体」は、無防備にも意識を失っており、キュウリティ面では多大なリスクを背負うことになる。
また、この状態は、「居眠り姫」という呼称の原因にもなっていた。

「あー。はいはい。
ヤバネ・ジューロ君ね……」
学生課の職員は、ヤバネの学生証を確認すると、書類の束をめくりながらのんびりした口調で答えた。
「うん。君が、最後の実験参加者だ。
これ、君の武紋ね。
手の甲にこの札を押し付けて、認証、と叫ぶと、術式が体にしみ込む……そういう話しですから。
実験の目的は、この術式が人体に与える影響を調べること。
それに、どの術式が一番強力なのか、調べること。
実験に参加する場合は、この同意書に……」
「実験に参加しない場合は？」
「この実験、王庁の肝煎りだからねえ。
よくて奨学金の打ち切り、悪くて退学ってところじゃないの？
もちろん正式にそういう話しがあったわけじゃあないけど、当学院は王立だからね。うちとしても王庁の意向に逆らうわけにはいかないのよ……」
実験動物の代わりはいくらでもいる……ということか……と、ヤバネは理解する。
「ここに名前を書けばいいんだな？」
ヤバネは職員からさしだされた書類にざっと目を通しながら、確認する。

ルールは単純な勝ち残り戦。期間は無制限で、最後の一人になるまで続行する。負傷や死亡をした場合の保障、勝ち残った場合の恩賞（どちらも金銭面に限っていえば、えらく気前がいい条件だった）……など細かい取り決めについて、もっともらしいお役所言葉で記されている。

書類に署名して提出した後、引き換えに「最後に残った武紋」とやらを受け取る。他の参加者はヤバネが王都を留守にしていた間に受領済み、だそうだ。

開戦（五）

その「武紋」とやらは、一見したところ、表面に精緻な術式がびっしりとしるされた大判のカードにみえた。

それを左手の甲に押し当てて、

「認証！」

と、叫ぶ。同時に、

「あっ……っちィ……」

と、軽く舌打ちをする。

手の甲が熱を放っていた。いや、カードの表面にびっしりと記された術式がほどけて、手の甲からヤバネの体内、奥深くへと染み込んでくる感覚。ヤバネの脳裡に、その「武紋」の使用法その他、詳細な情報がしみ込んでくる。

気づくとヤバネは、額に汗を浮かべて学生課窓口の前に棒立ちになっていた。

ずいぶんと長く感じたが、さりげなく周囲見渡すかぎり、ヤバネが「その幻覚」に捕らえられていたのは、どうやら、ほんの数秒間のことらしい。

短時間に膨大な情報を叩き込まれたため、軽い眩暈を感じた。

「……弓の武紋、か……」

ヤバネは手の甲を見下ろしてから軽くつぶやき、学生課をあとにする。

ヤバネ自身は、この実験に積極的に参加すべき義理も意志もないのだが……なにしろ、往来のまんなかでいきなり抜き身の武器を振り回すようなのが相手だ。なんらかの歯止めをかける者は、必要になるだろう。

ヤバネは駆け込んできた時と同様の性急さで学生課の事務所から出ていき、そのままキャンパスの中を全力で疾走していく。平日の

昼さがり、人通りも多く何人か顔見知りともすれ違ったが、挨拶をかわしている余裕はない。
一路、高所へと。

「ふふん。
正面からの一撃は、受け止めたか。受け止められたか」
シャルアリアラの声は、笑いを含んでいた。
「さすがは楯の武紋、あの程度ではどうにもならんか」
シャルアリアラの言葉通り、槍の穂先は、ダウドが捧げ持つ楯によって、完全に制止させられてしていた。その一撃には、軍用馬による突撃以上の力が込められていた。楯のおかげで穂先の侵攻こそ阻止できたものの、膨大な運動量をまともに受け止めたダウドは、顔を真っ赤にしながら体ごと後方に、かなりの距離を押されている。
石畳の上に、ダウドの靴跡が二本の軌跡として長々と刻印されており、摩擦熱が発生しているのか、そこから湯気があがっていた。
「背後の見物人を守ろうとしたか。その意気や好し」
呟いて、シャルアリアラは槍を消す。
こんな状態になりながらも、最後まで槍の動きを止めようとしたダウドの気魄に、シャルアリアラは素直に感嘆する。
「そなたは……優しいのだな」
シャルアリアラはそう声をかけたが、ダウドの方は脂汗を流して息を荒くするだけで、答えを返す余裕はない。
シャルアリアラは、肩で息をしているダウドの大柄な体を観察する。
首と四肢は太く、に胸が分厚い。肉体労働で鍛え上げられた下層階級特有の体形だったが、シャルアリアラはそれを卑しいとは思わない。
「ここで勝敗を決するのも、無粋。
そなたとの決着は、またの機会に譲ろう」
シャルアリアラがそういってダウドに背を向けるのと同時に、ダ

ウドはがっくりと膝をつく。
「何奴！」
同時に、視界の隅に異物を認めたシャルアリアラが、一度は消した槍を出現させてダウドの横合いにひらめかせた。
横合いからダウドに躍りかかろうとしていた人影が、シャルアリアラの穂先に弾かれて後退する。
「ダズルダッター王が三男、ズジャルア・ダズルダッター。この場でシャルアリアラ・シャルファフィアナ姫に決闘を申し込む」
抜き身の片刃剣を構えた、貴公子然とした格好の若い男が、そこに立っていた。
童顔で、整った顔の……少年、だ。ただし、その整った顔は、驕慢な笑みに歪んでいる。
年の頃は、せいぜい十代前半といったところだろう。
「実験の参加者か。それは重畳」
シャルアリアラは、これみよがしに槍をしごいてみせる。
「そなたはこの場で討ちはたしたとしても、なんの呵責も感じないですむな」
いいながら、シャルアリアラはさりげなく移動して、ダウドとズジャルアの間に割り込んだ。
正面から槍を受け止め、消耗したダウドの油断をついて攻撃する……というやり口は、シャルアリアラの好むところではない。ズジャルアの整った顔を、より正確にいうのなら、その表面に張りついた驕慢な表情を、シャルアリアラは卑しいものと認識する。
「槍と剣では間合いに差がありすぎる。そなたの勝ち目は薄いと思うが、文句はあるまいな」
シャルアリアラがわざわざ口にだしてそう続けたのは、ダウドが逃げる隙をつくるためだ。
「殿下が相手ならば、不足はない」
ズジャルアはそういって、奇妙な構えをみせた。

両手で長剣の柄を掴み、肩に担ぐような構えだ。
「捨て身か？」
刃身を肩のうしろに置き、つまり防御をまるで無視したズジャルアの構えをみたシャルアリアラが、つぶやく。
剣は、前方に構えて牽制と防御にあてる……というのが、定石であった。
ズジャルアの構えは、前方からの攻撃に、あえて自分の体を晒している形だ。
「我が郷里では、一般的な型です」
ズジャルア・ダズルダッターは、妙に冷静な声で答えた。
次の瞬間、目を見開いたズジャルアは奇声をはっしながらシャルアリアラに迫る。
シャルアリアラは、無造作に槍を横にふるってズジャルアの突進を阻止、ズジャルアは、真上に跳躍して槍を避け、剣に体重を乗せてシャルアリアラに向けて振り下ろした。
シャルアリアラはわずかに体をずらして、剣の軌跡をかわす。
さっきまでシャルアリアラがいた石畳に、すっぱりと直線上の斬れ目が入っていた。
勢いで石畳を「砕いた」のではなく、「斬って」いた。
それも、ズジャルア・ダズルダッターがもつ剣の長さよりも、不自然なほど長々とした切れ目が刻まれている。
「そなたの剣も、武紋だったな」
シャルアリアラが、つぶやく。
「さよう」
ズジャルアは、不敵な笑みをみせた。
「わが武紋に斬れぬものなし」
斬る……という機能に特化した武紋……で、あるらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5617z/

武紋戦記

2011年12月23日06時48分発行